

# 築理会報 96 新年号

1996年1月発行 Vol.13

発行所：東京都新宿区神楽坂1-3

東京理科大学工学部 ・ 部建築学科

築理会事務局 03-3260-4271 (内3293)

03-3235-6897 (FAX)

明けましておめでとうございます  
 本年もよろしくお願いたします  
 築理会幹事一同

新生築理会と名打ち、各々の活動を行った  
 昨年、その報告と共に、活性化を指標とし  
 た今年度の活動予定を巻末に掲載します。

## 平成7年度 築理会活動報告

- 1月27日 第7会築理会総会・懇親会  
 飯田橋会館 出席者39名+1名(教員)  
 委任状110通  
 会長 八木嘉也、副会長 坂下 誠、  
 他幹事35名選出 会則改正案承認
- 2月24日 築理会第1回研究セミナー(理窓会館3  
 階会議室)  
 「緊急報告 阪神大震災を振り返っ  
 て」松崎育弘先生(本学教授)
- 2月27日 幹事会(理窓会館2階会議室 出席20  
 名) 事務局長、常任幹事(21名)、  
 会計、会計監査選出
- 3月17日 築理会第2回研究セミナー(理窓会館  
 3階会議室)  
 「ノースリッジ地震に見る鋼構造物の  
 被害」穂積秀雄氏(5期・本学助手)  
 「阪神大震災における鉄骨構造物の被  
 害」坂本光雄氏(4期・鹿島小堀研)
- 4月17日 第1回常任幹事会(7号館5階製図室  
 出席18名)活性化検討委員会(坂本)  
 等設置

- 4月21日 築理会第3回研究セミナー(理窓会館3  
 階会議室)  
 「音と住環境」福島寛和氏(16期・建  
 設省建築研究所)
- 4月24日 95年度築理会「新会員歓迎懇親会」  
 (理窓会館2階会議室)
- 5月26日 築理会第4回研究セミナー(理窓会館3  
 階会議室)  
 「情報スーパーハイウェイで変わる都  
 市・建築 インターネットの脅威  
 」沖塩壮一郎先生(本学教授)
- 6月21日 第2回常任幹事会(7号館5階製図室  
 出席19名)
- 6月23日 築理会第5回研究セミナー(理窓会館3  
 階会議室)「サンタクロースの来る家  
 の設計」鈴木信宏先生(本学教授)
- 8月 3日 第3回常任幹事会(7号館5階製図室  
 出席14名) 企画総務(大岩)、名簿  
 (田中)、会報(久米)各委員長選出
- 9月12日 第4回常任幹事会(7号館5階製図室  
 出席10名)
- 9月 平成7年度版築理会名簿発行  
 築理会報 95夏号発行(vol.12)
- 11月14日 見学会 FCGビル(フジサカビル)  
 本社ビル) 参加13名(9常任幹事+4)
- 11月14日 第5回常任幹事会(7号館4階製図室  
 出席15名)事業(河合)委員長選出
- 12月12日 第6回常任幹事会(7号館5階製図室  
 出席13名)  
 会則改正(企画総務試案)検討

## 平成7年度 築理会決算報告

	収 入		支 出	
平成6年度繰越		338,462		
築理会費		2,937,944		
名簿			印刷・発送 600冊	1,836,236
会報			印刷・発送3600部	413,757
セミナー	参加費	352,000	会場費、資料、御礼	77,340
(1~5回)	(計176人)		震災義援金	50,000
学生との懇親会	会費	89,000	会場費・料理代	100,100
通信・その他	銀行利息	1,279	事務費	39,799
総計		3,718,685		2,517,232

次年度繰り越し予定 1,201,453円

## 現場見学会

昨年11月14日、鹿島建設（株）の坂本氏（部4期）並びに高橋氏（部4期）のご尽力により、同社が臨海副都心に建設中の（仮称）FCGビルの現場見学会が行われました。

ご存じの方も多いと思いますが、首都高速の浜崎橋ジャンクションよりレインボーブリッジを湾岸道路へ渡る際、東京の空もこんなに広いのかと思われるロケーションの中、お台場の東側に建つ、長方形フレームの左側上部に球（展望台）を設置した建物です。

私も仕事柄この橋をよく通るので今年の4月頃より気付いていたのですが、最近、外装のアルミのカーテンウォールと球形のチタンパネルとが西日に当たって輝いている様は、SF映画の名作「2001年宇宙の旅」（スタンリー・キューブリック監督）に出てくる木星探査船ディスカバリー号を彷彿させる思いです。

5年弱でこの名作の設定された21世紀となりますが、益々数多くのスカイストラクチャーが林立することでしょう。あのモノリスの様に。

ところで、当建物は縦横の比率を、ハイビジョンTVの画面の縦横の比率と同じにしたそうです。では、案内をしてくださった高橋氏と参加者のレポートを紹介します。（久米）

### 現場レポート：FCGビル

平成5年5月に着工したこのFCGビルは、臨海副都心の台場地区に、21世紀のメディアの核にふさわしいフジサンケイグループの新たな受発信の発展基地として、建築主：（株）フジテレビジョン、設計：丹下健三・都市・建築設計研究所、施工：鹿島建設（株）によって現在建設されています。

地上25階、地下2階、最高高さ123m余、延べ床面積14万3千㎡、S造（一部SRC造）、の規模を持つこの建物は、外装がアルミのカーテンウォールになっています。また建物の用途は、地下が駐車場と機械関係諸室、1階から7階までの低層部がテレビスタジオとその関係の諸室、ショップ、シアター等の共用部、7階が屋上庭園、7階以上がオフィス棟とメディア棟になっています。そしてこの両棟を12階、18階、24階の3フロアの階にあるコリドールで連結し、このコリドールの最上部にチタンパネルで外装した直径32mの球体展望室があります。

この展望室は地上から約100mのところ、しかもこの球体を支えているマストコラム（3.2m×4.8mスパンの四隅に4本の柱を配置しその4本の柱を構造的に大きな一本の組み柱として考える構造で、この建物が要求している9.6m×19.2mの大スパンの空間を可能にしている）から芯ずれしているという極めてユニークな位置にあるため、従来の工法で建てるには工程及び安全上難しく現場



としては大いに頭を悩ませた所でした。結局7階で構築して24階までリフトアップするのが良いのではないかという結論に至りました。

1,250t前後の重量の球体をこの高さまでリフトアップするのは国内ではあまり例がなく、心配でしたがリフトアップ当日の現場見学会では大勢の人が見に来てくれて、盛況のうちに無事リフトアップを完了させることができました。

おかげでこの球体は、今ではこの地域のランドマークとして見る人の目を十分楽しませてくれます。このビルは平成8年の6月に竣工する予定ですが、その暁にはまさに臨海副都心の中核ビルにふさわしい雄姿を見せてくれることでしょう。

( 部4期 高橋 直人  
鹿島FCGビル工事事務所次長)

#### FCGビルを見学して

スーパーラメン構造や、展望室のリフトアップ等、現代の施工技術をフルに活用した建物であることがよくわかりました。

しかし、私としては丹下健三設計ということで、意匠的なディテールを見たかったのですが工事中の見学であったためかありませんでした。是非、竣工時にもう一度見学したいものです。

( 部5期 島田 徹也)

#### 臨海副都心を見て

この度、OB諸氏のご厚意により、FCGビルの現場を見る貴重な機会を得ることができた。現代施工技術の粋を集めた素晴らしい建築物であり、その形態からも将来、地域のランドマークとなるに違いないと思われる。具体的なことは他の方にお任せして、私は同時に目についた臨海副都心の印象について書いてみたい。

世界都市博開催中止の賛否については様々な意見があるが、私は中止して良かったと思う。わざわざ海を埋め立て、敷地をつくり、建物を建設し、街を創ろうという発想はどこか胡散臭い。できたばかりの『ゆりかもめ』は確かに綺麗で快適だ。無人で走り、ホームに駅員の姿はない。高層住宅もどんどん建っているし、ホテルも立派だ。これが新しい都市の姿なのか。何か変である。そうだ！人の『におい』がしないのだ。街と人が馴染んでいないのだ。

本来、人が集まったところでできる街なのに、入れ物を造るだけで街が出来ると勘違いをしたのだろう。こんな街には住みたくない。

今後、計画が徐々に実現され、また違った風景が生まれるであろうが、住民と膨大な時間が必要とされる。人がいなくては街は成り立たない。これは地方の過疎地も東京の真ん中も同じなのだ。

( 部2期 坂下 誠)

#### 未体験ゾーンの探検

今回の見学会は初めての事ばかりでした。そのせいか終始ここは日本か？ここは東京なのか？と思っていました。

まずは『ゆりかもめ』。無人で走る乗り物に乗るのは何とも変な感じがしました。そしてまだまだ工事現場だらけの台場地区。巨大な建物が点々と建ち、そこにいるのは現場で働く人々とインフラの整備に携わる人々ばかり。その光景は、ここがこれから生まれ形成されていく街なのだと私に痛感させました。

そんな場所に着々とその最終形態を表わしつつあるFCGビル。それは今まで私が見たこともない様な建物でした。まだ周囲に何もなかったためその巨大さを肌で感じ取ることができるのです。『ゆりかもめ』で徐々に近づいて行くとどんどん大きくなっていき、どこまで大きくなるのかと思わせる程です。建物の前に立ち、内部を見学し、そして最後に感じたのは、「私をこんな不思議な気持ちにさせたのは、ものすごいスペースを贅沢に、ある意味では無駄につかっているところなのだ。」ということでした。巨大な柱、巨大な空間、巨大な球体が私に未体験の感覚を与えてくれました。そして、台場地区ひいては臨海副都心全体の将来像がとても楽しみになりました。

皆さんも一度行ってみては如何がですか？

( 部16期 平賀一浩)

#### FCGビル見学会に参加して

大学院生：坂井鉄也、吉原タケル、古籾武彦

S：まずはこの様な企画に我々を参加させてくださった築理会の皆様に感謝いたします。あまり学生は現場を見る機会がないから面白かったよね。

Y：建築の現場っていうのは授業とか、こういう機会がない限り見る事ができないよね。この企画を知ったのは小泉さんの机の脇に案内のチラシを偶然見つけてね、丹下健三のFCGビルは前から気になっていたから面白そうだって思ったんだ。

S：こんな企画なら参加したい学生は多いだろうね。

K：いや遅れてごめんよ。いや一混んでたよ。どれくらい混んでたかという七色の猿が踊り狂うTVショーみたいだったよ(一人爆笑)。

Y：またこんな企画があればいいよね。

S：そうだね。古籾はどう思う？

K：紫の猿がチラシをばらまく役なんだ。うぶぶぶぶぶぶ...

## 幻の5期

### 知られざる工学部建築学科卒業生

仮にAさんとしておこう。Aさんは神楽坂の建築学科を5年前に卒業し、現在10名程度の設計事務所に勤めている。Aさんはある現場で現場次長のBさんを紹介された。Bさんも理科大学工学部建築学科出身だという。AさんはBさんが何期の卒業の方かと築理会名簿で調べてみた。しかしどうしても名前がない。築理会名簿は性が変わっても新しいところには出てこない。全部の名前を見ていったがやはりない。Bさんは何かの都合でウソを言ったのだろうか。それとも築理会名簿が間違っているのだろうか。Aさんは今も腑におちないでいる。

さてこの話であるがBさんの言っていることが間違っているのだろうか。それとも築理会名簿が間違っているのだろうか。大学の資料を見ると工学部建築学科の昭和45年(3月)卒は166名となっている。この年の築理会名簿による卒業生は108名である。58名はどうなってしまったのか。これを理窓会名簿で調べてみた。理窓会名簿ではこの年は工学部建築学科(神楽坂校舎)卒と工学部建築学科(野田校舎)卒と分けて卒業生が記されている。当然、理窓会名簿では理工学部1期生としては、次の年の昭和46年(3月)卒からである。理工学部建築学科の同窓会でも一度同窓会名簿(「建理会」昭和59年)が出されているがこれも理窓会名簿と同様、昭和46年卒が第1期生である。

この時のいきさつは「東京理科大学100年史」を見ると次のように記されている。”この地区(野田)に学生を受け入れたのは、昭和41年4月のことで当初は工学部の教養課程を分離し、神楽坂の過密さを緩和する計画であった。しかし、この計画は変更され、(中略)、この年度の工学部志望者には希望する校舎を選択させて同時に入試を行っている。(中略)、新学部設立準備委員会は新設する学部の名称を理工学部とする案を承認し、(中略)、これに伴い野田校舎に在学する工学部学生に対しても、次年度に理工学部編入させ、第1回生として卒業させたい考えもあったが実現せず、既定通り工学部学生として野田校舎で教育を完成させることとなった。”とある。このように理工学部の幻の1期生は工学部建築学科卒となったのである。築理会の会員の皆様はどこかでこのような方々と出会うかも知れない。これには以上のようないきさつがあったことを、記憶のどこかに留めておいていただければと思う。Bさんも築理会

名簿も共に正しかったのである。

次の一文は工学部建築学科(野田校舎)卒の深田氏に記してもらった。

3期 大岩昭之(理科大助手)

### 築理会によせて

深田良雄(部5期、野田校舎卒)  
昭和41年春、入学手続のため初めて野田校舎を訪れた。運河沿いに建つ管理棟(1号館)と各学科が入る2号館の2棟が、広大な敷地に寂しげに建っていたのが大変印象的であった。その後毎年新校舎や、実験棟が建設され大学としての風格を備えていくことになる。

野田校舎工学部建築学科として入学した我々70名強の新生は、若干の東京都内からの通学生を除き殆どが他府県出身者であった。その為か非常に結束力が強く、1年の時大学側の次年度以後の方針が示され、新たに理工学部が新設されることになり、我々も理工学部編入することが打診された時も、数回の学生集会を経て理工学部編入を拒否したと記憶している。その後卒業まで学部に関する議論もなく、野田校舎の昭和41年入学の我々だけが工学部建築学科卒業という変則となった。

卒業後約25年を経過した現在、当社には神楽坂、野田の理科大建築学科卒業生が多数入社してきている。ある時理科大卒の新入社員に「深田さんは工学部ですか、理工学部ですか?」と聞かれ、「工学部だよ」との答えに「なぜ築理会に入っていないのですか?」と問われ、初めて築理会の存在を認識した次第である。

改めて考えてみると、誰しも卒業した学校の同窓会組織に加盟しており、それに対する活動の程度の差こそあれ、この組織を通じて先輩、後輩の関係が明らかになっている。築理会も工学部建築学科卒業生による一種の同窓会組織と考えられるが、我々昭和41年入学の野田校舎工学部建築学科卒業生は、神楽坂校舎卒業生とは同じ学舎で、共通した先生に教育・指導を受けたわけではなく、このことから築理会の入会資格を有しないのかもしれない。また、理工学部のこのような組織にも、学部の違いから入会できないであろう。

築理会の活発な活動と、工学部での位置付けが不明確な現状を知るにつけ一抹の寂しさを感じる。(鹿島建設設計エンジニアリング総事業本部)

### 第3回宮城支部総会開催

第3回東京理科大学建築学科OB会宮城支部総会が11月25日会員47名中19名（工学部 部8名、部2名、理工学部9名）の参加により、盛大に開催された。

今回新年度の役員の改選が行われ、下記の人を選出された。

支部長 佐藤昌宣（工学部 部4期）  
幹事 千葉一雄（理工学部 2期）  
幹事 玉川和典（理工学部 6期）  
事務局 佐藤三郎（工学部 部8期）

今回は特にOBの中から宮城県庁住宅課企画調整係主任主査、千葉達司氏を講師としてお願いし、宮城県から見た遷都問題、県発注の建設及び設計の発注の考え方、県発注のコンペとその作品についてについて講演して頂いた。その後ディスカッションと懇親会が行われた。ディスカッションでは、特にの作品について、デザイン優先の施工上の問題や機能性について、白熱した議論が交わされたが、成功か失敗かは専門家の目からの判断だけではなく、利用客や地域住民の反応を含めた幅広い目で判断すべきであるということに落ち着いた。次回もまた白熱した建築論が飛び交う会合にした。

スペースプランニング代表

佐藤昌宣氏（工学部 部4期）より

### 部OB会主催勉強会報告

部OB主催による勉強会が去る9月から11月にかけて3回開催された。

既に築理学会報にも掲載されたが、この勉強会は15年目を数え、多くの講師の方々のご理解、ご協力のもと、OB諸氏の参加を得て運営されている。昨年は『阪神大震災から何を学ぶか?』を共通テーマに毎回30名を越える参加者を集め、盛況であった。

9月22日は杉山英男先生（本学建築学科教授）を講師にお迎えし「木造建築の被害と提言」と題する講演を頂いた。スライドによる木造建築の被害状況を中心になぜ壊れたのか?を解説していただいた。「ここだけの話ですが……」の前置きで始まるお話は、公の場では拝聴できない貴重な内容であった。

10月20日は（株）前川建築設計事務所の中田準一先生（部設計製図非常勤講師）による「神戸の成り立ちと被災状況」であった。歴史

の変遷でとらえた神戸の街の成り立ちと被災状況の相関関係は、非常に興味深いものであった。先生には講演後の“飲み会”にもご参加頂き、学生時代の思い出話に花が咲いた。

11月17日は「被災した現場から何が見えたか?」と題し、被災地に行ったOBを中心に意見交換が行われた。パネラーは寺林成子氏（部1期）、江原幸一氏（部8期）、生田佳和氏（部8期）の3氏であった。

参加したOB一人一人が、それぞれの立場でこの震災を風化させることのないよう、思いを新たにしたことであろう。「当たり前のことをきちんとやっていたら簡単には壊れないよ。」とおっしゃられた先生方の言葉に勇気づけられる思いであった。（部8期 斉藤栄士）

### OB最新作紹介

福岡にて

伊谷 峰（部21期）

竹中工務店東京本店設計部

95年3月にアクロス福岡（設計：日本設計+竹中工務店）が竣工した。コンペの開始が1989年末であることから5年以上の歳月を経て完成したことになる。この間、当社の設計スタッフだけでも20人以上が関わり、私自身も90年11月より92年3月の着工に至るまで基本及び実施設計に携わった。



意匠・計画、建設大臣特認等の通常業務に加え、基本構想に関わったE・アンバーツ氏との調整でニューヨークに渡ったことが懐かしくも思われる。

オフィス・店舗の民部分とホール・国際会議場の官部分が14層に亘るアトリウムを介する構成となっており、外観は、3面がカーテンウォール、南面は天神中央公園との一体化を図ったステップガーデンとして塔屋上部まで階段状に立ち上がる。計画当初は、市民に開放されるステップガーデンなる謳い文句に少なからぬ不安を抱いていた。植物の生育や防水等の技術的課題もさることながら、計画自体の持つ意味合いに疑念を抱かざるを得なかったことも今だから吐露できる。

昨夏、出張の際に『アクロス』に立ち寄った。夏の強い陽射しがアトリウムに差し込み、やや冷淡な仕上げの表面を照らしている。公園側の巨大な楔形のエントランスを抜け、振り返ると竣工後はじめての夏を迎えた木々の緑が一面に広がるのを確認できた。汗をにじませながらステップガーデンを上り続ける。咲き誇る花の間を蝶や蜂が飛び交い、博多の中心であることを一瞬忘れさせる様な光景が展開される。健康のためとゆっくりと階段を上る老夫婦、最上段までのタイムを競いながら駆け上がる小学生達。巨大な構築物が、自然や市民の力により少しずつ、然し確実に呼吸を始めていた。

昨今の社会状況では考えられない資本投資であり、全ての面において首肯できる計画でないことも確かであろう。然し、この建築物の建設に携わった全ての者達が想像していた以上に、社会に対しプログラミングされ、都市に感応していることも、また事実なのである。

(掲載 新建築 9507、日経アーキテクチャ' ッス他)

## イベント報告

「中西繁展」有楽町マリオンギャラリーにて開催

「現代文明を謳歌している地球上の都市に、果たして明日の運命はあるのだろうか。」画家中西繁の心底には、いつもこの思いがあります。阪神大震災は、彼のこの問題意識をよりいっそう深めることとなりました。この魂の衝撃から、世界の都市が興亡流転する姿を“時間”という軸で鋭く切り取った連作“漂流都市”。(紹介資料より)

部4期卒中西繁氏の個展が10月31日(火)～11月6日(月)、有楽町マリオン8Fギャラリーにて開催され、油彩100号の大作から30号以下の小品まで約40点が展示された。中西氏は在学中の1966年に第32回東光展に初入選し、日展にも1982年の初入選以来6回入選しており、1992年には東光会ボストン展受賞をしている。

作品は、地震直後の被災地神戸、漂流都市臨海副都心などの近作が中心であり、建築家中西繁を窺わせる鋭い直線のタッチが印象的であった。

初日の夕刻開かれたオープニングパーティには4期生10名ほどがお祝いに駆け付け、作品を前に画家中西繁と暫しの懇談に時を忘れた。

なお、中西氏は東急設計コンサルタントに席を置く建築家である。(部4期 坂本光雄)



写真：自らの作品前での画家中西繁

## OBのオフィス訪問

(部20期 森 清)

郵政大臣官房建築部長

野々村俊夫氏(部1期)

設計課長および参事官のポストを経て95年6月に建築部長に就任した。1966年に郵政省に入省して以来、設計畑を中心に歩んできたが、当時と現在では状況が大きく変わったという。野々村氏はその違いを次のように説明する。

「入省したころは、朝から晩まで製図板に向かって図面を描いていた。最近では、内部で手掛けるとしても基本設計まで、あとは外部の事務所の力を借りてまとめている。」国の方針を受け外部への委託が進み、マネジメント中心の業務に移行しているのだ。また、生産設計の概

念が重要となり、設計段階で施工を考慮することが必要とされている。

このような状況を基に、組織改革に取り組んでいる。郵政省が誕生して以来の組織を、初めて大掛かりに変えることになる。また入札制度の改善など、解決していかなければならない問題も山積だ。「最近の目まぐるしく変化する世界に遅れをとることなく対応していかなければならない」と手綱を締める。

野々村氏が大学の卒業時に郵政省を選んだのは、景気後退で民間企業の採用が激減したこともあるが、設計の道に進みたかったことが大きな理由だ。「採用試験の前に、にわか勉強で郵政省について学んだ。入ってみて、いいところに潜り込めたと思った」と当時を振り返る。



これまでいくつかの郵便局舎も手掛けてきたが、代表プロジェクトと呼べるのが、埼玉県大宮市の28階建ての合同庁舎、そして長野市の郵便貯金会館の建て替えだ。いずれも、これから完成する大型物件である。

「倉敷市庁舎の完成を境に、官庁建築と民間建築の違いが薄れ、都市がフラットな印象になっている。こうした問題を踏まえ、郵便事業の顔として、また公共建築として、郵政建築の方向性を打ち出していきたい」と意気込みを語る。

石橋徳川建築設計所代表

石橋利彦氏（部5期）

大成建設時代の同僚である徳川宜子氏をパートナーに設計事務所を構えて10年がたつ。独立以来、建築雑誌にコンスタントに作品を発表し続けており、その活躍ぶりは周知のことだ。

事務所は東京は銀座の外れにある。歌舞伎座

が近く、雰囲気のある飲み屋も多い。女性スタッフを含めて3人という所帯ながら、現在、住宅・別荘・工場など複数の物件が進行中だ。

石橋氏の事務所では、94年の春に大きな改革を実施した。製図板をすべて捨て去り、CADを全面的に導入したのである。通常、販売店などにセットアップまで依頼するところだが、機器の発注から立ち上げまで自分たちで行った。プロッターの接続には苦労したが、定価ベースで100万円となるコストを半分に抑えることができた。マッキントッシュのクアドラ840AVと20インチモニターとの組み合わせを3セット、プリンター・プロッターそしてMO装置がその内容だ。ソフトはミニキャドで、3台のパソコンをLANで接続している。

今では、施工を担当するゼネコン、サブコンがCADを入れたいと言うと、ボランティアで機器の選定からセットアップまで面倒をみる。結果としてデータの共有も容易になるなどそのメリットは小さくない。

「CADは、経営者が率先して導入しないと効果がない。担当者に一任するとソフトが陳腐化しても新たなものへの移行を言い出しにくいからだ」と石橋氏は強調する。また、「手描きの図面なら他人に手を入れられることに抵抗があるが、CADならそれがない」と言う。

昨年11月には、住まいの図書館から「関連のディテール」を発売した。図版も含めすべてマックで対応。約6カ月という短期間で仕上げた。これを独立後10年のひと区切りにさらなる飛躍を目指す。





## 編集後記

私が、編集長を仰せつかって2度目の会報です。年4回の定期刊行を軌道に乗せるべく、多方面のご協力を頂き今回の発行に漕ぎ着けました。発行することのみが目的にならぬ様、記事の内容にも気を配りますので皆様のご意見、ご協力を宜しくお願いします。

私事で恐縮ですが、歴史物の書物を読むようになって8年程過ぎました。温故知新といわれる通り、先人の生き様には啓発されるところが多々あります。最近では、勝海舟の「氷川清話」(角川文庫・勝部真長編)を読みました。勝海舟の魅力を改めて認識したのは勿論ですが、いつの時代にも混迷した社会、政局や世情があるようで約100年前も現在もさほど変わらぬなあというのが印象でした。

どうぞ、今年は良い年であります様に。  
(久米 恵祐)

## データ確認カード返送のお願い

この度、名簿作成委員会では築理会会員の皆様のデータ-新作業に着手する事となりました。つきましては、同封のデータ確認カードにご記入の上、ご返送下さいませお願い致します。

最新データに基づいた名簿作成、編集のためご協力をお願い致します。

名簿作成委員会

築理会報96新年号

96年1月発行 Vol.13

編集長：久米恵祐

編集委員：森清、細井友治、伊藤学、  
伊谷峰、平賀一浩

印刷：(株)菅原印刷

## インフォメーション

### 96年度 築理会研究セミナー

会場：理窓会館3階会議室

会費：各回 2000円

時間：19:00~20:30

2月 2日(金) 大岩 昭之(部3期)  
「CD-ROM “チベット建築~知られざる建築を訪ねて~”を見る」

3月 1日(金) 日笠 端先生(計画)  
「都市防災」または「東京臨海地域」

5月10日(金) 伊藤 裕久先生(計画)  
「戦後の集合住宅(仮題)」

秋以降の予定

9月 吉沢 晋先生(環境)

10月 清水 昭之先生(材料・施工)

11月 O B (構造又は施工関係)

### 祝卒業 築理会新会員歓迎懇親会

築理会新会員となる学部卒業生(部)、  
大学院修了生を迎えて懇親会を催します。

日時：2月27日(火) 18:00~

会場：理窓会館3階会議室

会費：未定

### <新刊紹介>

真鍋恒博 著

『図説 近代から現代までの金属製建築部品の  
変遷 第1巻 開口部関連部品』

建築技術(96年1月末刊行予定 4,000円程度)

大岩昭之 著

CD-ROM 世界の歴史と建築シリーズ

『チベット建築~知られざる建築を訪ねて~』

(株)バス 9,064円(Windows)

石橋利彦・徳川宜子 著

住まい学大系073 『関連のディテール』

住まいの図書館出版局 2,400円

《出版された方はご連絡下さい》

### 築理会事務局に

## 専用FAX設置!

この度築理会事務局に専用FAXが設置されました。皆様のご意見、ご感想、その他各種情報をお待ちしております。また住所等、変更事項もこちらで受け付けております。

03-3235-6897